

寢  
言



N.0

いつものように男は妻の声で目覚めた。何か夢を見ていたような気がしたが、それがどんな夢だったのか思い出すことはできなかった。ここ数日、目覚める度に同じ感覚があった。何か特別な夢を見ていたようで、それが何なのか思い出すことはできないのだ。

枕元には昨夜に読んでいた自己催眠の本が置かれたままになっていた。「これであなたもデキる人間に変身」そう銘打たれた本を見て、妻は侮辱的な薄笑いを浮かべる。

「そんな本読んで、少しは効果があるのかしら」

妻はそう言って部屋を出ていく。妻と寝室を別にしてから一年ほど経っていた。妻はとうに男に愛想を尽かし、愛情といったものは遠い過去の記憶となっていた。それも無理のない話で、男は職場ではリストラ寸前にあり、収入も生活がやっとの有様だった。現状を打破する気力も無く、職場では蔑まれ、家に帰れば妻に罵られる生活だった。

男は妻の入れた薄いコーヒーを飲みながら、夢の記憶を辿っていた。しかし、断片的にすら思い出せない記憶に、男はすぐに考えるのをやめた。どうせ今夜も同じ夢を見るのだろう。そして明日の朝も思い出せないのだ。

妻は夫の横に座ると、視線を夫に向けないまま話した。

「そういえば、あなた最近、寝言を言うのよね。どこかの女の名前でも言ってるのかと思ってよく聞いてみるのだけど、何を言ってるのかよく分からないのよね」

「よせよ」

男は一瞬どきりとしたが、浮気などした覚えはないし、女性から相手にされるような自分ではないことは嫌になるほど理解していた。

「そうよね、あなたみたいな人が浮気なんてできるわけないものね。まあ安心だわ」

妻は嫌味をたっぷりと含んだ口調で夫の顔を見て笑った。男は妻のこの表情を見るたびに、いつそこの女を殺すことができると考える。しかし、男にはそんな大それた勇気など持ち合わせていなかった。男は妻の言葉を無視するのが精一杯だった。

「まったくどんな夢を見てるのかしら」

連日続く寝言に妻も不思議に思い始めるようになっていた。それもそのはずで、男はそれまでイビキはおろか、寝言など言ったことはない。

「何か夢を見ているはずなんだが、それがどんな夢だったのか思い出せないんだよ」

男の言葉に妻は身を乗り出した。

「そうだ、寝言を録音してみましようよ。そうすれば夢の内容も分かるんじゃないの。私もいつも寝言が何を言ってるのかさっぱり分からないもの」

妻は珍しく楽しそうな表情を見せると、押入れから古びたテープレコーダーを引っ張り出してきた。男は始めは乗り気ではなかったが、やはり夢の内容が気になってその提案に賛成した。

妻の話だと、男の寝言はいつも明け方に始まるという。妻が起こそうとするとすでに寝言を言っているらしいのだが、それがまるでどこか別の国の言葉か呪文のようで、さっぱり分からないのだという。

男はその夜、枕元にテープレコーダーを置いて床に就いた。テープレコーダーの横にはとうに読み終えた自己催眠の本がそのままになっていた。「デキる人間」に変身どころか、社内では男のリストラがいよいよだと囁かれ始めていた。

男は緊張のせいかなかなか寝つけなかったが、やがて深い眠りへと落ちていった。明日になれば夢の正体が分かる。その思いに期待を抱きながら。

男はいつもと同じように妻の声で目覚めた。いつもと違うのは、妻の声がいつもより弾んだものになっていることだった。

「録音できたわよ。あなたの寝言。これで私の疑問も解けるわ。早く起きて」

男は眠い目を擦りながら、ベッドから体を這い出した。妻はすでにテープレコーダーを持って部屋から出ていっていた。

男はテープレコーダーの置かれたテーブルの前に座ると、妻にコーヒーを入れるよう頼んだ。妻は面倒そうにも珍しく夫の要求に素直に応え、コーヒーを用意した。

男はコーヒーをすすりながら、巻き戻されるテープを眺めていた。妻は興奮したように、それが待ちきれない様子だった。巻き戻しが終わると、男はコーヒーを飲み干し、軽い緊張を感じながら妻の動きを見つめていた。

「では聞いてみるわよ」

妻は再生ボタンを押すと、ボリュームを大きくひねった。

スピーカーから流れる声は間違いなく男の声だった。そして不思議な呪文のようなものを唱え続けていた。妻はそれが何なのか、スピーカーに耳を近づけて必死に内容を聞き取ろうとしていた。

男はその自分の寝言を聞いて、しっかりと夢の内容を思い出していた。

男は真っ白な部屋の中で催眠術師と二人っきりだった。催眠術師に合わせて男は不思議な催眠術の呪文を唱えるのだ。そして全てが終わり、催眠術師がこう言うのだ。

「これで奥さんを殺せる勇気が出ますよ」

男は視界がぼんやりと赤く染まっていくのを感じていた。宙を浮いているような意識の中で、目の前のテープレコーダーを掴んでいた。妻が何かを叫んでいるのが遠くに聞こえていた。

男は力強くそのテープレコーダーを妻の頭部に叩きつけていった。血に染まった妻の顔が曇り硝子の向こうのようにぼやけて見えた。男は自分が「デキる人間」になったのだという実感と喜びの中、繰り返し妻の頭を叩き割った。

終

## 寝言

<http://p.booklog.jp/book/33619>

著者 : N.O

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/noofoo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33619>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33619>

Twitter

Twitter [http://twitter.com/nao\\_ond](http://twitter.com/nao_ond)

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.